

学位論文題名

『夜の寝覚』の研究

学位論文内容の要旨

本論文の内容は以下のとおりである。

【はじめに】本論が、従来あまりにも女主人公中心に論じられてきたが故に見逃されてきた『夜の寝覚』(原作本)の他の問題点について、その前史としての『源氏物語』を經由しつつ読み解いていく試みであることを表明する。

【第一章】中世の改作本『寝覚』の冒頭が、〈母のない幼子〉という発想の「型」に回収されていくような物語状況を中心的課題として提示していたのに対して、原作本はそのような発想の「型」といったものに回収されてゆくことを回避する表現機構を持っており、「予言」として定位できない表現、読み解かれない「夢」のこぼれを、この物語の冒頭は方法的に記述しているのだといえること、また、従来読み逃され〈解釈の空白〉となっていた天人の発言にも、実は予言的機能があったことを論じており、本論文全体の基調ともなる論である。

【第二章】作中の「をこがまし」という表現を手がかりに、『夜の寝覚』の帝の人物造型の〈系譜〉上の位置づけを試みる論。この物語においては、「をこがまし」という感情表現が、帝以外の人物にはほとんど見られない点に着目し、寝覚の帝の「をこがまし」という認識は、女を手にし得ぬが故の「をこがまし」さであることを述べ、また、自分の心を収めることがないという点で、光源氏的な心情とは異なり、女を手にし得ないということだけを見れば夕霧と似ているが非なるものであり、結局、『夜の寝覚』の帝は、『源氏物語』の薫の「をこがまし」という認識を「継承」する人物として特徴づけられていることが、物語表現から読みとれることを指摘する。

【第三章】『夜の寝覚』第三部の所謂〈帝闖入〉事件は、従来、女主人公の側から論じられ評価されてきたが、もう一人の主役たる冷泉帝については等閑視されてきた。本章は、狭義の引用論に拠らず、「発想の型」の類同性を読む視点から、帝をめぐる表現・人物造型のありかたに注目し、帝の造型が基本的に『源氏物語』の柏木・夕霧・薫・匂宮の組み合わせとシフトであり、それによって帝の作中機能の方向性が決定づけられ、物語の推進力たり得ていることを鮮やかに論証する。

【第四章】『夜の寝覚』中で唯一「草のゆかり」と称される、女主人公の継娘・督の君と、〈帝闖入〉事件後、帝の「寵愛」を一身に集めた寝覚の上の実子・真砂君。本章は、この両者の担う作中機能についての考察であり、共に帝の触覚的認識によって寝覚の上によそえられる両者は、いわば二者一対の相互補完関係にあること、そしてそのことが、『源氏物語』における〈ゆかり〉・〈形代〉の〈方法〉といわれるものを想起させながらも、それを相対化しつつ、物語を展開させる推進力となっていることを指摘する。

【第五章】〈身体〉の〈病〉の向こう側にある言葉にできない心の動きは、解釈可能なものとして、例えば「病」や「物の気」あるいは「妊娠・出産」として、しばしば一元的に解釈される。このとき何が隠蔽され、また、どのような解釈がさらに固定化されていくのか。この問いを起点とし、〈病〉と〈孕み〉をめぐる思考の鑄型と「二重の疎外」の機制について、『夜の寢覚』第三部の分析を通じて考察する。

【第六章】「～恥づかし(さ)」という語を女主人公の心情を象る重要なキーワードの一つであると捉え、寢覚の上の抱く「恥づかし」という内面の表現は、他者の思惑を推量し回避しようとする感情と常に結びついていること、さらにそれは、彼女の「身」にまつわる感覚と密接に結びつき彼女の身を律する(暴力)として作用する表現であることを明らかにしたうえで、従来「成長する女君」と言われる彼女の「成長」は決して単線的なものではなく、むしろ心身の違和感と「成長」へのためらい・自己規制に満ちていることを鋭く抉り出す。

【第七章】『夜の寢覚』研究史において男主人公論は非常に少ない。本章では、こうした現状に鑑み、男主人公についてある程度まとまった記述が見られるふたつの研究書を概観し、最近の研究動向をもにらみつつ再検討することで、男主人公論の旧説の修正(理想性、政治性)、今後の論の方向性(平安朝物語から中世王朝物語への過渡期的作品であること)について問題を提起する。

【第八章】従来、女主人公論の添え物のようにして必要に応じて言及されるのが、男主人公の『夜の寢覚』研究史におけるポジションだったのだが、「心づくしなる」「御仲らひ」の相手として、あるいは一登場人物として、「ことわり」という語を手がかりに、女主人公中心主義によらない表現分析を試みる。その結果、『源氏物語』において展開の要所要所に周到に配されていた「ことわり」ということばは、『夜の寢覚』においても受け継がれているものとおぼしく、また、そのようにして『夜の寢覚』の『源氏物語』に対する批評性が獲得されていると結論する。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 後 藤 康 文  
副 査 教 授 身 崎 壽  
副 査 助 教 授 大 西 郁 夫

## 学 位 論 文 題 名

### 『夜の寝覚』の研究

#### 審査の方法および経過

平成 17 年 12 月 16 日 第 1 回審査委員会 査読用申請論文の配布および日程調整  
平成 18 年 1 月 19 日 第 2 回審査委員会 申請論文の問題点指摘および質問事項の整理  
平成 18 年 1 月 24 日 第 3 回審査委員会 口述試験の実施および学位授与の可否判定  
平成 18 年 1 月 26 日 第 4 回審査委員会 報告書の作成および点検

#### 審査の概要

##### 1) 本論文の観点と方法

『夜の寝覚』(原作本)は現存する平安朝後期物語のひとつであり、『更級日記』の作者菅原孝標女の著作とする説が有力であるが、この作品に関する従来の研究は、女主人公＝寝覚の上中心主義的に偏向して進められてきており、ために、論じられてしかるべき他の幾多の問題が置き去りにされている状態にあった。本論文は、そうした『夜の寝覚』研究のありように疑問を投げかけ、これまで等閑に付されていた、帝・男主人公(内大臣)・真砂君・督の君といった〈周辺人物〉の造型や機能・役割を明らかにすることによって、すべてが〈孤高〉の存在である寝覚の上に収斂してゆくこの物語独特の仕組みをあぶり出すことを目的とする。また、それに際して、『夜の寝覚』前史としての『源氏物語』を随時経由し、物語本文を細心に読み解いてゆく点が、本論文の方法的特徴となっている。

##### 2) 本論文の研究成果

本論文は、伶俐な着眼と明晰な分析および巧緻な論理構成によって貫かれ、快刀乱麻を断つ論証の鮮やかさは読み手に知的興奮を覚えさせずにはおかないほどの高い水準に達しており、そこには申請者の非凡な研究能力が遺憾なく発揮されているといえる。すなわちこの成果は、いささか停滞気味であった昨今の『夜の寝覚』研究に新風を吹き込み、未踏の境地を意欲的に開拓したのものとして高く評価することができるのである。欲をいえば、第七・八章で試みられた男主人公論のいっそうの充実、論文の体裁として全体を締めくくる結章(おわりに)の付加など、さらに望むべき点もないわけではなかったが、そうした不足も文字どおり瑕瑾というに過ぎず、今後の課題として易々と克服されること必定と判断される。なお、本論文の「はじめに」を除く各章の草稿は、審査制度のある学術雑誌、または、依頼執筆による論集等に発表済みのものであり、学界においてもすでに相応の評価を得ていることを付言しておく。

### 3) 学位授与に関する委員会の所見

上記の審査の結果、本審査委員会は、全員一致で、本論文の申請者宮下雅恵氏に対し、博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。